真モンスターハンター

佐藤太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真モンスターハンター

【Ｎコード】
Ｎ８６３１Ｚ

【作者名】
佐藤太郎

【あらすじ】
マサヤは、ヒビキ、ナオユキ、ナツキと共にクエストをこなしていく。
恋愛もあり！？

第1話

僕の名前はマサヤ、今日で１８歳、ここカプコ村では一人前だ。
母「ほら、朝食しっかり食べてね。」
僕は少し急いで朝食を食べた。
何故なら今日はハンターの儀があるからだ。
ハンターの儀とは今年１８歳となる者を集めハンターとする儀式だ。
僕の他には、友達のヒビキとナオユキとナツキという人らしい。
マサヤ「よし、行ってくる！」
僕は村長の家へと向かった
マサヤ「え～とここらへんかな？」
僕は人目見てその大きさで気づいた
マサヤ「ここか、大きいなー」
マサヤ「失礼しまーす」
村長「おや、もう来たのか。」
僕が一番のようだ
村長「まだ他の者は来ていないようだな。」
マサヤ「じゃあ、他の三人を呼んできます。」
村長「おぉそうか、よろしく頼むぞ」　僕は三人を探しに向かった

第2話

マサヤ「よし！ヒビキの家にまず行こう」
マサヤ「え~ とこっちだったな」
カプコ村は小さいのですぐにヒビキの家に着いた
マサヤ「ヒビキ～」
ヒビキ「いま行く～」
マサヤ「よっ！」
ヒビキ「よし！行こう！」
マサヤ「いや～あと、ナツキとナオユキを探さないと」
ヒビキ「あっそれなら家近いから、ナツキー！」
ナツキ「はーい」
ヒビキとナツキは家が近いので呼んだらすぐに来た
ナツキ「もう二人とも集まってたんだ」
マサヤ「よし、ナオユキを探しに行こう」
ナオユキ「おっ三人集まってたのか！」
マサヤ「よし、皆集まったから村長の所に行こう！」
マサヤ&ヒビキ&ナオユキ&ナツキ「ゴー！」
ヒビキ「よし、行こう」
マサヤ「よし」
皆で村長のもとへ向かった
マサヤ「そういえば皆使いたい武器決めた？」
ヒビキ「僕は太刀がいいな」
ナオユキ「俺はランスだな」
ナツキ「私は弓かな」
ナオユキ「そうゆうマサヤはどうなんだよ」
マサヤ「僕は双剣だね」
そうこうしている間に村長の家に着いていた

第3話

村長「おや、四人とも集まったか、では、ハンターの儀を始めるとしよう」
村長「まぁ特にする事は無いのだがな」
村長「まず始めに説明したいのは、四人ともハンターになったとして、拠点となる家のことなんだが、村の端にある、大きな家があるからそこを使いなさい、部屋はもちろん４個あるぞ」
村長「そして、装備のことなんだが」
ナオユキ「待ってました！」
村長「さっき言った家の隣に武器屋と防具屋があるから、話は伝えてあるから、好きな物を使いなさい」
ナオユキ「やったー！」
ナオユキは楽しみにしていたのか、すごく喜んでいた
村長「よし、これがハンターの証だ、四人分あるのでもっていきなさい。
マサヤ「ありがとうございます。」
村長「それなら、武器屋と防具屋でそれぞれ好きな物を選び、家で休憩して、明日の朝、もう一度ここへ来なさい」
マサヤ＆ヒビキ＆ナオユキ＆ナツキ「はい！」
マサヤ「よし、まずは家に行こう」
ナツキ「そうしよう」
僕たちは村長の家をでた
ヒビキ「よし、まずは家に行って少しなにか食べようか」
ナオユキ「そうしよ！オレ腹減ってんだよ」
マサヤ「よし、行こう」
僕たちは拠点となる家へと向かった

第4話

マサヤ「おっここかな？」
ヒビキ「ここにマサヤ・ヒビキ・ナオユキ・ナツキの家って書いてあるよ」
ナオユキ「腹減ってんだよ、早く入って飯食おうよ！」
マサヤ「よし、そうしよう」
僕たちは家へと入った
ナツキ「広いなー」
家は驚くほど大きかった
ヒビキ「部屋が四つあるからそれぞれ決めようよ」
マサヤ「一つ一つ見てみよう」
まずは一番左の部屋を見に行くことにした
ガチャリ
ナオユキ「おー広いな」
一番左の部屋はとても広いが、ベットと照明器具しかない殺風景な部屋だった
ナオユキ「俺、ここがいい！家具は後で少しずつ揃えればいいし」
一番左の部屋はナオユキの部屋に決まった
ナオユキ「よし、ここで荷物を置いたりしてるから」
マサヤ「次の部屋に行こう」
僕たちはナオユキをおいて左から二番目の部屋にいった
ヒビキ「おー本棚だ！」
この部屋はそこそこのひろさで、ベッドと照明器具、小さな本棚が置いてある
ヒビキ「ぼくここがいい！」
マサヤ「あーいいよ」
ヒビキ「ありがと！」
ヒビキをおいて、右から二番目の部屋に行った

ナツキ「わー豪華！」
そこは普通の広さで、大きなベッド、照明器具、小さな棚があった
ナツキ「ここ使ってもいい？」
マサヤ「もちろん！」
マサヤ「最後まで残っちゃったよ」
僕は最後の一番右の部屋に行った
マサヤ「おっここが一番いいや」
そこは、やや狭く、小さなベッドに照明器具、本棚があり、本棚の中には本が三冊はいっていた
マサヤ「ちょうどいいや、本もあるし」
マサヤ「本が気になるけど、お腹空いたから何か食べに行こう」
僕は皆を呼んで集めた
マサヤ「よし、酒場に行って何か食べよう」
ナオユキ「賛成！」
ナツキ「よし、行こ！」
ガチャ
その時、誰かが家に入って来る音がした
ヒビキ「えっ？」
そこには、僕の女友達のミヨコがいた
マサヤ「あれ、ミヨコどうしたの？」
ミヨコ「村長の娘は、ハンターにならないでハンターのお手伝いさんをやる事になってるの」
マサヤ「そうなんだ」
ナオユキ「じゃあ早速料理作って」
ミヨコ「はい」
ナオユキ「やったー」
ヒビキ「えっミヨコってマサヤと付き合ってるとか噂の」
ナツキ「そうみたいね」
僕はドキドキしていた、何故なら、僕のガールフレンドだからだ

ミヨコ「ねぇマサヤ、私はマサヤと同じ部屋でいい？」
マサヤ「別にいいけど、狭いよ」
ミヨコ「それならなおさらいいんだなー」
ナオユキ「ちょっと早くつくってよ」
ミヨコ「あっすいません」
僕たちは料理が出来上がるのをまつ事にした

第5話（前書き）

この中で、主人公達が酒を飲んでいますが、日本では二十歳まで飲酒は禁止されています

第5話

ミヨコ「は～いできましたよー」
ナオユキ「おーうまそーだな」
テーブルの上には、カプという草食獣のステーキ、シーラという魚のフライ、ホピ酒がある
ナオユキ「俺、ホピ酒大好きなんだよ」
マサヤ「僕シーラのフライ好きなんだよ」
ミヨコ「やったー」
ヒビキ「よし、いっただっきまーす」
一同「いただきまーす！」
ナツキ「フライ美味しーい」
ナオユキ「ホピ酒旨ーい」
マサヤ「美味しい！」
ミヨコ「良かったー」
１０分後
マサヤ「ごちそうさまでした！」
ヒビキ「よし、武器屋に行こう」
マサヤ「じゃあミヨコ、後片づけよろしく」
ミヨコ「分かった、いってらっしゃい」
マサヤ「いってきまーす」
僕たちは家を出た
ヒビキ「家の隣だから便利だね」
ナオユキ「よし、早速だけどおっちゃんランス見せて」
店主「すまんが、うちは片手剣、弓、大剣、太刀しかないんだ」
ナオユキ「ランスないのー」
店主「ハンターさんの活躍次第で増やしていくから」
ナオユキ「しかたないや、大剣にしよう」
ナオユキ「カプコクラッシュください」

店主「これだな」
そこには、扱いやすそうな、少し細めの大剣があった
ナオユキ「ありがとうございます」
ナツキ「私、カプコ弓」
店主「はい」
これも初心者向けの扱いやすそうな、弓だ
ヒビキ「カプコソードで」
マサヤ「僕はカプコミニソードを」
店主「これとこれね」
ヒビキ「格好いいなー」
ナオユキ「よし、早めに防具屋に行こう」
僕たちは防具屋に向かった

第6話

マサヤ「よし、防具屋ついた！」
ナオユキ「おっちゃん！ハンターシリーズ有る？」
店主「すまんが、新米ハンターさんには、レザーシリーズをあげる事になっているんだ」
ナオユキ「ちぇー」
店主「まぁ色がいろいろできるからしばらく我慢してくれ」
ナオユキ「じゃあオレ青で」
マサヤ「僕、緑」
店主「プレーンバージョンだな」
ナツキ「私、白！」
ヒビキ「僕は黄色！」
店主「明日の朝にはできるから明日来てね！」
ナツキ「ありがとうございました」
マサヤ「よし、家でこれからの計画をたてていこう」
僕たちは家をでた
ガチャ
マサヤ「ただいまー」
ミヨコ「お帰りー」
ヒビキ「二人ラブラブな感じだな」
ナオユキ「俺も彼女欲しいなー」
マサヤ「あっそういえば部屋に本が三冊あったなー」
僕は部屋から本を取りだし、皆に見せた
マサヤ「1つ目、モンスター図鑑」
ナオユキ「おー欲しい！ちょうだい！」
マサヤ「駄目だ！これは僕の物だ！」
ヒビキ「これがあれば安心だな」
ナツキ「次は？」

マサヤ「これは・・・女のおとしかた」
マサヤ「ナオユキにやるよ」
ナオユキ「あっ・・ありがと」
内心嬉しいナオユキだった
マサヤ「三冊目は、モテモテハンター」
マサヤ「ナオユキやるよ」
ナオユキ「ありがと・・」
ナツキ「そろそろ疲れたから休憩してから晩ご飯たべよ」
マサヤ「あと30分したら準備してね」
ミヨコ「うん、分かった」
ヒビキ「各自、部屋に行こ！」
ナオユキ「あれ、ミヨコさんどの部屋なの？」
ミヨコ「マサヤの部屋だよ」
ナオユキ「くっくそ！本読んで勉強しよ！」
僕はミヨコと一緒に部屋に入った
ミヨコ「ねぇーいつ私達キスするの？」
マサヤ「今度初めてのクエストいったらね」
ミヨコ「えー今しよ！」
彼女は僕にキスをせがんだ
マサヤ「ほら、いいから晩御飯作って」
ミヨコ「じゃあ寝るときキスしてくれる？」
マサヤ「わかったよ」
ミヨコ「じゃあ準備してくるね」
僕は内心ドキドキしていた

第7話（前書き）

疲れているんで今回凄い短いです

第7話

ミヨコ「はい、出来ました」
マサヤ「おー豪華だな」
机の上にはカプカルビ、モガシーラの刺身、バリサラダ、キャプの実が並んでいる
全員「いただきます！」
ナオユキ「カプカルビ旨い！」
マサヤ「脂がすごいのってる」
ヒビキ「キャプの実甘酸っぱいな」
僕たちはガツガツ食べていった
全員「ごちそうさまでした！」
ナオユキ「は～食った食った部屋に行こ」
マサヤ「ちょっと休憩して皆で入浴場に行こう」
ヒビキ「あーそうしよう」
僕はミヨコと一緒に部屋に入った
マサヤ「は～お腹いっぱい」
ミヨコ「そういえば明日どんなクエストなの？」
マサヤ「まだ聞いてないんだ」
ミヨコ「そうなんだ」
その頃ナオユキの部屋では
ナオユキ「やっぱり部屋が広いといいね」
ナオユキ「あっそうだ、マサヤから貰った本読もうかな」
３０分後
マサヤ「よーし皆入浴場行こ！
ヒビキ「そうしよう」
家を出て入浴場へと向かった

第8話（前書き）

コメントくれると嬉しいです
こうしたほうがいいなど、こんなん登場してくださいとか受付中です
今回も短いです

第8話

ナツキ「夜の村は綺麗だね」
ヒビキ「あっここ今話題のジュース屋だ！」
ナオユキ「帰り道によろう！」
マサヤ「いいね！そうしよう」
5分後
マサヤ「おーでかいな！ここだな」
ナオユキ「男湯と女湯と混浴に別れてるぞ！！」
マサヤ「もちろん男湯で」
ヒビキ「僕も」
ナツキ「もちろん女湯だね」
ナオユキ「混浴にしよ」
マサヤ「必死だな笑」
ナオユキ「うるせえ！」
ヒビキ「いこいこ」
僕たちは三組に別れた
マサヤ「おー景色いいな」
男湯は景色と爽快感重視になっている
そのころ女湯では
ナツキ「わー広い！」
女湯は広さ重視になっている
気になる混浴ゾーンでは
ナオユキ「・・・」
ナオユキ「嫌だー！！！」
ナオユキ「おばさんばっか」
老婆「若いのこっちにきてちょ♪」
ナオユキ「うぐっ！」
マサヤ「そういえばジュース屋でなに売ってるの？」

ヒビキ「四種類売ってるんだ」
マサヤ「ほぉほぉ」
ヒビキ「キャプジュース、スタミナジュース、ガンリキジュース、モテモテジュース」
マサヤ「なんか1つ怪しいな」
マサヤ「とりあえずゆっくりつかろう」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8631z/

真モンスターハンター

2012年1月10日00時47分発行